

無の意義

柴野恭堂

無字は是れ宗門の一關、干將莫耶の劍、豈不明の沃兒衷心失命せざるを得んや。若し夫れ徒らに文字を弄せば雲煙萬里迷宮に入つて出路を失ひ、強いて言詮に關れば却つて玄機を漏洩せん。然りも雖も無字の必要は文字に依らずんば顯彰するに由なく、言語を俟たずんば將た何を以てか活機活用の具みなさん。

止んなん止んなん言ひ得るも三十棒、言ひ得ざるも亦三十棒。汲めども盡きぬ生命の泉、澎湃際涯を見ぬ思想の海、其の源由を尋ねて「無」に入る處、漕ぎつけて見よや彼岸の花は何？

敢へて注脚を施して以て叱咤を待つ。

(一)

總ての智識は思惟を以て始まり判断に於て成立する。思惟は所謂思考の三法則に従つて或は肯定或は否定の判断なる。於茲肯定された有と否定された無との對立が生ずる。然し乍ら若し判断にして單に對象が概念に對する關係を意味するのみであるならば、其は即ち概念の遊戲、同語反覆に外ならぬであらう。カントが既に第一批辨證論に於て指摘した如く、存在は判断の特徴を爲すものではなく、判断の絶對的必然性は單に事件の又は判断の賓位の條件的必然性であるに過ぎない。従つてそれは結局可能性又は蓋然性の智識を提供するに過ぎない。かゝる抽象的な智識に基いて真理の確固た

る證憑を求むることは當然不可能であらねばならぬ。

故にカントは客觀的智識の根據を先驗論理の方法に求めた。是によれば先驗悟性概念の形式を以て經驗的知覺的素材を合理的に限定するに在つた。故に先天的綜合判斷の可能を唯だ現象の範圍内に於てのみ確保することに依て始めて客觀妥當的眞理性は發見せられることが出來たのである。

けれども果して此れは問題の解決であつたであらうか。寧ろ更に新しい問題の提出ではなかつたか。何となれば彼の「經驗の理論」に従へば其の *fin sich sein* に於てあるものを *nach sich sein* に於て假定しなければ所謂公理的眞理性の根據も崩壊せられなければならぬからである。若し然りしすれば吾人はかゝる假定が何に依て保持されることが出来るか。従つて究竟の眞理を決定し確證するものは何ぞも問はなければならぬ。概念的智識は最後まで證明を必要とする。先驗的統覺若くは意識一般を價值意識若しくは規範意識と理解して不可避的遁環論證を不可不の諦認に於て認容せんとするも、尙ほ幾多の困難に遭遇する様に思はれる。存在の前に價值が先立つと説くりツケルトの立場に於ても依然所與性の範疇以前に非合理的何物かを想定せねばならず、さりてラスクの如く客觀主義の立場に赴くせば更に形而上學的非難を蒙るを奈何せん。

結局吾人はカントの所謂限界概念としての「物自體」を現象と兩者共に理性又は意識體系の作用の兩面、若しくは意識の統一活動そのもの、契機を意味するものと解することに依て前掲の質問に對する一層正當なる答辯を期待することが出来るのではあるまいか。而してかゝる意識自體の原始的本質を爲すものとて今茲に論題とせる「無」を考へて見たいと思ふのである。

勿論理性の自覺に基いてコペルニクスの偉業を成就したカントの功績は、考へ様に依てはかゝる「無」の發見を基礎づいてあつたを見ることも出來やう。然し彼に於ては物自體を現象及び先驗的統覺との關係が可成り暗礁をなして居る様に思はれる。彼の哲學體系の首石を爲すべき目的論を以てしても理論理性を實踐理性との根本的統一は容易ならぬ事業であると言はなければならぬ。是れ全く彼の思想を育んだ二元的思想が環境の力と共に徹底的に彼を支配したことに基因する。彼は形而上學的要求を滿たす爲に餘りに多くの犠牲を拂つて顧みなかつた。此の意味に於てカント以後のイデアリズムの巨星等は充分に出藍の譽に價するものがある。

扱て然らば「無」を本質とする意識は如何にして吾人の目下の要求を滿たし得るか。それは直接に客觀若くは對象を結びつけた理性の絶對的自意識であるからである。換言すれば其れは意識の絶對肯定即ち否定の否定としての無が其自身の中に内容を定立する意識だからである。故に其れに於ては知るものと知らるゝものとが一になつた具體的知識がある。是れ即ち自覺智又は根本智である。第一義である。眞理内容そのものである。有限なる概念的智識は感覺的直觀を素材とし、根本知を原型として構成せられた模型である。かくて根本知は知識以前の知又は無知の知を稱することが出来る。これこそ客觀的眞理概念の公理的基礎である。概念的知識に於ては判斷に依て客觀が主觀の下に包攝せられなければならなかつたのであるが、根本知に於ては判斷を必要とせず、唯だ絶對的定言があるばかりである。「無」はそれが自同の意識に於て客觀を前提する。故に客觀の有は直ちに無に包括され、無の全體が一時に露現して有と相融合し、其の間更に隔歴する處がない。其處では我れが事物を知るのではなく、事物が我を知るのである。又は我が事物の中に我を見るのである。故に我れは無我である。かくの如き自同の意識を礎石として其上に建てられた建築が概念的智識である。即ち判斷に依つて前

者の普遍から後者の特殊を演繹するものである。然し乍ら此の演繹も「無」に在ては却つて部分を全體に歸納することである。前者の場合では現實的なるものは可能的なるものを特殊の制限の下に原因とした特定の結果である。然し後者の場合では現實的なるものは可能的なるものであり、而して無の逆も亦眞である。現實的なる結果を同時に歸結(Folge)として可能的なる原因を理由(Grund)たらしむる先驗的體認に知識以前の知、無知の、知の特色は存するのである。

故にカントの説く先驗論理の方式は寧ろ彼れに屬し、形式論理は寧ろ此れに屬する陰喩であり、説明であることも云ふことが出来るであらう。於茲吾人はヘーゲルと共に、*Was vernünftig ist, das wirklich ist, dass wirklich ist. Was wirklich ist, dass vernünftig ist, das vernünftig ist* と言ひ得る筈である。かくして「無」の自同意識の全體の側が物自體に相當し、其の差別的部分の側が現象に相當するものも理解することに依て、カントの二元論を超えた一元的要求を満たし前に期待された解答をも示す事が出来るのであるまいか。

以上の如く論理的判斷に於ては同一律を假定して居り、其自身決して内容を定立することが出来ない限り、斯れば主觀的であり常に相對的に反立を豫想しなければならぬことが明かになつた。かゝる *Diskursiv* な知識を以てしては永久にツオイヌの像を見ることは出来ない。吾人は有無の對立を止揚した「無」に依て如實に事物の真相を徹見せねばならぬ。

(二)

「趙州和尚因僧問狗子還有佛性也無州云無」

狗子に佛性ニあるにあらず。狗子に著する時んば狗子を見ず佛性を執する時既に佛性を距る。兩頭截斷して「無」の一語よく渴を醫し得たり。殺活自在、與奪無碍、狗子に佛性ニ何づれか尊く、何づれか卑しからん。「無」を見るものは萬物

を忘れ、萬物を取るものは「無」を失ふ。「無」の一喝に依て無は無の當體を自證覺知し本來の如々自身に還る。本より有無相對を超え眞偽正邪の差別を泯じ、獨自爾の境に湛然たり。其は純粹なる永久の現在である。然し乍ら決してエンデミオンの如く永遠に眠る混沌不動の實在ではなくして、常に自覺的活動を營む當體である。その活動の過程に於て有無對立し現象ミ本體ミ分れ、眞偽善惡の別を生ず。唯一なる無が二元に分裂し多に分化することは、其自身の知性の内的自由必然性に基き、その知的全能の力を發揮せんが爲に外ならぬ。此の作用は目的なるミ同時に結果である。於茲「無」は最早本の無にあらずして有限の中に自己を限定する。即ち具體的に個別化して自然又は世界を生産するに至る。けに「無は萬物の母であり、創造主である。(「大初に言あり、言は神ミ倍にあり、言は神なりき、萬物之に依りて造られ、造られし者、一ミして之に由らで造られしは無し」—ヨハネ傳) 萬有は無の發展分化に由つて無字なる限り能く無の姿を宿すここを得る。一木、一草、狗子、人間に至るまで自然界に於ける總てのものは偶然的假象の存在から脱して、必然的存在の理由を獲得する。無は萬物の存在をして眞に存在者たらしむる本源的支持者である。無字の出現ミ萬有の誕生ミは同時である。

斯の如く無字は無が自らの觀念の中に自然を眺める主觀的立脚地即ち作用的契機であり、萬有の存在は其の客觀的立脚地即ち對象的契機である。前者は所謂本體の世界、無限の世界にして後者は現象の世界、有限の世界に相當する。無は世界を創造しつゝ再び之を自己に還元する循環運動を無限に反覆する。此の意識活動の状態を生ミ云ひ愛ミ云ふ。故に自然が單なる自然に止まるならば「無」から介離して生ミ愛ミを失ふ。従つて其は虚偽であり、非存在であり、死である。自然は無字を通じて無の絶對愛に抱擁せらるゝ限り眞であり、生存であることが出来る。狗子を殺す劍は佛性を賦與する刀で

ある。

無字は決して有限と無限との統一を現はす主觀的象徴ではなく、却つて生命の具體的現象としての有無同居を意味する客觀的事實である。生命の流動に於て其は常に清新潑瀾と展開する事實である。何となれば生とは又有有限が無限を忘れざらんとする久遠の内的努力即ち愛の實現換言すれば有が其の生れ故郷に還らんとする無限の憧憬、又は眞知を追求する終り無き研鑽であるとも言ひ得るから。故に生命活動に在ては無は常に其處に去來する。たゞひ個々の存在物が無の全體を個定的持續性を以て保留し盡せないにしても、走馬燈の如き其の生の廻轉を繼續する間に無が彼と直接現在せんとする永恒の課題が生まれ、有は久遠化の聖域に活躍する。此の刹那が精神の誕生であり、無字の出生であり、自然と人生の分岐點である。無字は有限と無限の境界であり、有の終りと共に無の始を語る。私はビイデルマンが他の目的の爲に用ひた幾何學の圖形に狹る説明法を借りて茲に左の如く述べることを許され度い。

有限と無限、自然と人生との關係は一つの平面の上で交叉して其内容の一部分を共通に所有して居る二つの圓の關係ではない。寧ろ其關係は同一の球を中心を横切つて別々の方向に切る二つの圓面の關係である。前の場合では二つの圓は夫々特殊の部分をも有すると共に兩方に共通の部分をも有して居り此部分は同じ様に兩方のものである。後の場合では二つの圓面が球の直徑で交叉するから直徑の上でなら何の點でも接觸して居るが共通の面の部分は一つもなく、兩者が相觸れ相截る所は同時に兩者の相分れる所である。此の中心は根本意識としての無であり、球は無の活動舞臺としての世界全體であり、切截面の交錯點が無の具體的個性化した無字である。と。

若し斯様に説くことが出来るならば、趙州の「無」は狗子成佛の引導、實に電光石火もたゞならぬ生命の閃光が天地の暗

黒をかすめて過ぐるが如く、佛に逢つては佛を殺し、祖に逢つては祖を殺し、冷徹透々人をして慄然たらしむるものがある。然かも佛法滴々の意趣は之に依て毫も毀損せらるゝことなく、却つて燦然光輝を増す。人一度び此の光に觸れて衷心失命せんか、十有由旬の須彌山頂より奈落の下底に到るまで一括して以て提擧するを得べく、唯我獨尊水月の道場に登ることを得ん。性具の十界一時に莊嚴を具足し彼れ又出入自在、佛に入つては佛となり、鬼に入ては鬼に化す。是れ所謂佛祖を手を把り同一眼見同一耳聞する所以に外ならぬ。

光の誕生に於ては暗黒の原理が其の根據となる。しかも「暗は之を曉らざりき」。無の出生には意識の對象的契機即ち有が其の原理である。しかも有相に住すれば偏見に墮す。(凡所有相皆是虛妄若見諸相非相即見如來。若以色見我以音聲求我是人行邪道不能見如來。—金剛經)

不立文字、拈華微笑、不傳の傳の端的、暗に於て光を見、無に參するものにして始めて了會するであらう。

(三)

上來述べ來つた處を以て見れば、無は萬有を生じ愛を以て自己に還元せんとし、萬有は無を生存の目的又は理想として欣求する。其の感應する處、忽然無字の火花が散る。理想と現實の相接觸する時、生命の尖頂に信仰の燈火は點ずる。かくて智的對象として絶對的真であつた無は今や人格的意志者として要請せられ、宗教的對象としての意義を擴充する。

扱て謂ふ處の宗教とは何ぞや。シモニデスの沈黙と躊躇を繰返すことなく余は敢て言ふであらう、「宗教とは神と人との關係である。」といふ最も古い定義は或解釋の下に於ては矢張り最も簡明適切なるものとして維持されねばならぬ。即ち人格的實在である或る者に依て吾人の現實の生命の意味を理解し判定し充實させ、遂には之を合一することに依て無愛

の國、永生の國に逍遙することを得る深奥なる生の内的體驗こそ宗教である。若し斯様に注脚を加ふることが案山子を以て置き換へるの愚にあらずんば、無を直ちに宗教的對象と解することは恐らく躓きとはならないであらう。

現實の存在者としての吾々人間は萬有中の一員として即自には有限の制約に規定される。其の未だ無邪氣なまごろみの内に過ぐす間は平和な自然である。純なる有である。然し生のディアレクティクは是れに終始することが出来ない。彼の内には一定の方向に向つて成長すべく運命づけられた萌芽が潜在する。即ち無の全提命令に従はなければならぬ。(「Hier ist gleich Erbsünde, der Mensch ist böse von Haus aus, also in seinem Innersten ein Negatives mit sich selbst.」—— Hegel) 於茲有無二勢力の間に戦が宣せられ、人類はディレンマの輓にかゝる。彼は遂に天を仰いで咏嘆するに至るであらう。現身は餘りに小弱い醜い姿である。呪はしくも禍と罪から嚇かされ勝である。流轉幻滅の悲哀と無常轉變の苦惱とは餘りに執拗に纏つてゐるではないか。(「噫われ困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや。——ポーロ」懷疑煩悶は遂に生存の無意義をすら唱へしむるに至る。斯く追及するに及んでは如何で一刻も此世界に安住することが出来やう。第二のノアの洪水が氾濫して總ての創造を再び混沌に歸せよかしとさへ思はれる。然し醉生夢死空しく死の神に捧ぐるには餘りに尊い生命ではないか。今や男々しくも試験に耐えて奮闘を續けつゝある時しもあれ、愛！理想！眞理！文化！彼を憐んで光を投げる。(旭の光上より幽暗と死の蔭に住める者を照らし我等の足を導きて平康なる路に至らせんて臨む。——ルカ傳一、七八、七九) 彼は一條の光明に導かれて無の世界に入る。筆舌に絶する祝福が彼の内に漲る。地獄で佛に遇つた歡喜は胸に燃え立つ。何者かは知らねど聖なる人格者の恵を感謝せずには居られない。彼は雀躍して思はず「あ、神よ」を叫んだ。目に見ゆる神が實在した譯ではない。靜かに胸の高鳴りを止めて生命の鼓動を聞けば、豈圖らん

や、神の囁きが吾が叫びの反響を奏で、居るではないか。總ては無字一枚、盡くが神の慈悲を讚美して居る。(エホバはわが光、わが救なり、われ誰をか恐れん、エホバはわが生命の方なり。——詩篇二十七)一切残らず解脱三昧である。穢土即寂光淨土、草木國土悉皆成佛である。況んや己身は蓮華臺上に菩薩と同坐するをや。彼はナルシツソスの様に暫し自分の姿に眺め入る。是れ全く世界の驚異でなくして何であらう。罪惡の凡夫生死の海に沈淪し出離の縁なしミさへ思はれた此の身が、久遠の世界の最も愛する鏡であつたのである。宇宙は彼の全身、一法界の自覺であつた。茲に無明の闇は霧散して眞如の光皎々たり。是れ覺知圓滿成就、無字の榮光、死の救済にして疑ふべからざる飛躍的事實である。

形而上學的の神はたこひ崇高偉大ならんも其はミダスの貨幣ミ選ぶ處がない。出息入息汝の面門より出入する神にして眞に宗教的對象ミなる。一度び無字の關門をたゝかんか、無の世界の扉は開き慈父の面前に召されるであらう。富を遠き求めて脚下の寶玉を放捨すること勿れ。(爾等神を識れり、反つて神に識られたりミ云ふべし)「キリスト我に在て生く——ポーロ)プロメトイスの根性は罪を増長するこも永恒に救はるゝこは出来ない、誰だ死があるばかりである。求むるものは與へらる、所詮は神祕であり祕義である。信は體驗であり、智はロゴスの鏡に於ける其の反影である。無の概念内容發展の原理を到底其外延を以て包み切れぬ處に無の哲學的理解を超えた宗教的意義が有る。知は必然的に信に迄到つて充足する。生死岩頭に立つて無字の利刀を揮ふ時、限定的知識は悉く征服せられたる。智慧の果實を偷んだ者に取ては忍び難い犠牲ミ云ふべきである。然し此の犠牲なくして墮落前のアダムに歸るこは絶望であらねばならぬ。太古の洪水はアガメンノンの家にのみ悲劇を齎し、神は其子を十字架上に釘つけたではないか。若し人類にして能く知識の葛藤亂麻を破碎すれば神の絶對愛の印章ミして彼は行(Tat, Handlung)の自由に再生するであらう。十字架を背負つて主の許

に到る者に神は永劫の安息を約束する。彼はキリストと共に明日は樂園に在つて春の小鳥の如く幸を壽ぐであらう。

單なる知は不自由であり出口なき迷宮に入る。知行合一の境に於ては隨處に主たることを得る。眞の自由は歴史の王國を客觀的行爲に依て創造すること換言せば神の最初の創造に參與することである。一舉手一投足悉く神の舞踏ならざるはなしは此の謂である。ヘーゲルの所謂、一切の現實一切の内容を盡く其自體より生産する絶對意識の立脚地も此れ異らぬ。吾人は之を神智若くは根本智の妙用若くは無の果徳と稱する。アリストテレスがテオリアの生活と名づけたものに該當する。(天はわが位、地はわが足登なり。——イザヤ書六十六)

「南泉和尚因東西堂爭猫兒泉乃提起云大衆道得即救道不得即斬却也衆無對泉遂斬之晚趙洲外歸泉舉似州州乃脫履安頭上而出去云子若在即救得猫兒」

南泉の斬猫有無兩斷了了て一劍天に依て寒し、虚靈不昧、普く乾坤を照破す。趙州履を脱いで頭上に安んじ、百尺竿頭更に一步を進むるの消息、活機縱横自由の境に獨歩す。容易に追隨を許さざる神智の妙用を見るべきである。かくの如くして人格的實在は絶對自意識の自己限定即ち對象性の中に自己を發見すること所詮は自由の活動そのものである。故に先天的綜合判斷の可能は所謂容知的質料としての有に依て無が限定されること即ち自由の可能に外ならぬと言ふことが出来る。從て自由に基く無の對象性の實現即ち歴史の世界に其妥當根據を見出す場合、無の哲學的意義が汲まれ、これに生き之を合一する場合其處に無の宗教的意義が了會せられるのではあるまいか。

以上の如く無の意義を理解することに依つて、吾人は「理性は宗教の基臺と爲り得る唯一の大地である。」と云へるヘーゲルの言葉を是認する。

於茲乎、愈々「無知の知」を提唱せるかの哲聖ソークラテースを想はざるを得ない。此の意味深重なる文字の中に魂の糧は蓋し不朽であらう。今や自己に忠實ならんことをすればする程、かのデルフォイの神殿に掲げられた金言に對して、限りなき崇敬の念と莊嚴の感とを益々禁じ得ざるを覺ゆ。私は永久に光ある言葉として茲に引用して此の稿を終り度いと思ふ。

曰く、「汝自身を知れ」(γνῶθι σεαυτόν)

隨筆に成る舊稿を殆んど其の儘載せて責に充つ、思索の未熟、筆致の杜撰を諒みせられ度い。

大正十四年八月二十四日